

現代イギリスにおける移民労働者

—サッチャリズムと EU 時代の映画の表象—

法学部法律学科 4 年 S 組 32203216 加藤拓樹

目次

- I. 序章
- II. 1980 年代の二世移民たち
- III. EU 加盟でやってきた移民たち
- IV. 終章

I. 序章

1. はじめに

2025 年 5 月イギリスのスターマー政権は、今後 4 年間で大幅に移民の流入数を減らすことを約束した。BBC の報道¹によると、海外からのケアワーカー受け入れ廃止や熟練労働者向けビザの厳格化などを通じ、2029 年までに年間 10 万人の移民受け入れ減少につながるという。具体的な効果が出るかは不透明だが、当面の間移民の受け入れ要件厳格化の声は高まったままだろう。背景にあるのは、イギリス政界において移民に対して厳しく臨む政党の勢いに対抗する現政権の思惑だろう。2010 年代以降、イギリスに限らず欧州で厳格な移民政策を掲げる極右政党が勢力を拡大し、既存の政党に迫る勢いで議席を多く獲得してきた。その最たる例が Reform UK だ。かつて Brexit (イギリスの EU 離脱) を主張した UKIP を源流とし、移民に対する国民の厳しい声を反映した大衆迎合的な政策を掲げてきた。確かに移民政策は各国政府の裁量に委ねられるものの、差別や偏見の助長につながる恐れもある。イギリスは歴史的に移民の積極的な受け入れと引き締めを繰り返してきたが、移民が国の労働力を下支えしてきたことは事実だ。2024 年のイングランドとウェールズにおける合計特殊出生率は 1.41 と減少傾向にある²が、国内の総人口は過去 50 年で 1300 万人と緩やかに増加している³。

¹ BBC News, “PM promises migration drop as he unveils plans for 'tightened' visa rules”, Sam Francis, Retrieved 30 Nov 2025. <https://www.bbc.com/news/articles/c9wgrv7pwrzo>

² Office for national statistics, “Births in England and Wales: 2024 (refreshed populations)”, Retrieved 30 Nov 2025.

<https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/birthsdeathsandmarriages/livebirths/bulletins/birthsummarytablesenglandandwales/2024refreshedpopulations>

³ Office for national statistics, “United Kingdom population mid-year estimate”, Retrieved 30 Nov 2025.

<https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/populationandmigration/populationes>

移民労働者が増えつつある今、彼らとの共生が課題となっている。共生について考えるにあたり、過去にイギリス社会でどのように移民労働者が扱われてきたのか、また映画が彼らをどのように描いてきたのか振り返ることは有意義である。本論文はまずイギリスの移民受け入れに関する歴史を概観し、その上でサッチャリズムと EU 時代の 2 つの映画から移民労働者が良い面でも悪い面でも新自由主義や弱肉強食の競争社会に影響を受けやすいことを明らかにしていく。

2. イギリスへの移民・サッチャリズム

イギリスの歴史は、移民と切り離して考えることはできない。長い歴史の中でも 20 世紀前半（戦間期）まではヨーロッパからの受け入れがほとんどだった。17 世紀フランスからユグノーが宗教上の迫害を理由に移り住み、ロンドンのウェストミンスターなどに居住区を形成した。19 世紀にはアイルランドから飢饉を理由に、リヴァプールやブリストルへやってきて産業革命時の工業の発展を支えた。⁴ 1948 年には国籍法を改正し、旧植民地（コモンウェルス）から労働力を補おうとした。南アジア（インド・パキスタン）や西アフリカ（ガーナ・ナイジェリア等）から多くの人々が移動し、カリブ系を運んだウィンドラッシュ号はよく名前が知られている。彼らは安定した給料と同時に、独立による混乱を避けるなど生活上の安定も求めてやってきた。だが当時の政府の姿勢として「有色の」移民を受け入れることにやや後ろ向きであり、インド周辺・アフリカ・カリブ系の移民を抑制しようとしていたことが明らかになっている。⁵ この姿勢は、後の 2018 年に発覚したウィンドラッシュ・スキャンダル（公的書類のないカリブ系移民の国外退去騒動）へ大きな影響を及ぼすことになる。

1950 年代・60 年代初頭は、安価な労働力として移民の流入が続く。上記の地域以外にも東西パキスタンや東アフリカのアジア系出身者が多く、20 世紀後半に大流行したロックバンド、クイーンのボーカルであるフレディ・マーキュリーもその 1 人だ。国内に目を向けると、戦後の復員によるベビーブームで郊外の新興住宅への移住者が増える一方、住宅不足や急な移民の増加で様々な人種がひしめく状態となる。1958 年夏ロンドンのノッティンガムヒルでは、一部の白人が黒人を住宅危機の原因として襲撃する人種暴動も起こった。また 1968 年に、保守党の国会議員イノック・パウエルが移民増加を古代ローマの血で染まったテヴェレ川にたとえる血の河（rivers of blood）演説を行って批判を浴びるなど、主

timates/timeseries/ukpop/pop

⁴ 富岡次郎「〈論説〉アイルランド系移民とイギリス産業革命」史学研究会（京都大学文学部内）1985 年、—1-2 頁。

⁵ Ian Spencer, “British immigration policy since 1939: the making of multi-racial Britain”, Routledge, 1997, p.51.

https://ia600204.us.archive.org/22/items/politicsDEEPWEB/British%20Immigration%20Policy%20Since%201939_%20The%20Making%20of%20Multi-Racial%20Britain%20-%20Ian%20R.%20G.%20Spencer.pdf

に白人から移民制限の声が上がるようになる。入国要件も血縁関係やビザなどの面で厳格化し、医師など資格を持つ高技能の移民が優先されるようになった。

70年代から90年代初頭にかけて数の大幅な増減は起こらなかったものの、移民2世や3世といった世代がサッチャリズムに適応し、イギリス社会で存在感を示すようになる。マーガレット・サッチャーは、雑貨店を営む両親のもとに生まれ、大学で化学を専攻したのち保守党のMP（国会議員）となった。イギリス史上初の女性首相となった彼女は、1979年から約10年その職にあった。「鉄の女」の異名を持つ保守政治家として知られ、アルゼンチンとの領土争いに勝利したフォークランド紛争によってナショナリズム的なアイデンティティを国民に思い出させた。経済面では新自由主義的政策を打ち出し、国営事業の民営化によって競争原理を導入するなど福祉国家からの脱却を図っていく。社会に目を移すと、家族や労働組合といった集団から個々人を切り離し、自身の責任と意思によって行動することを求めた。つまり「自由」な個人が国家や社会集団へ「依存」せず、落伍した者を救済するセーフティネットが存在しない社会となった。これらの政策を総称してサッチャリズムと呼ぶ。⁶

この80年代にサッチャー政権が躍起になったのが、「権威主義的ポピュリズム」である。ジェームズ・プロクターによると、労働組合の弱体化といった強権的な手法を「(実際には存在しない)人びと」が望んでいるという言説を創り出し、実行することだ。社会の中に「外部」と「内部」があるように見せかけ、「法と秩序」「私たちの生活様式」から逸脱する同性愛者や移民を「内なる敵」のように扱う。⁷これは本来敵ではない立場の弱い人々を敵に仕立て上げ、異質なものを排除するいじめの構図に近いかもしれない。80年代のイギリスで移民労働者が「内なる敵」とされたが、今や日本を含む世界中で二項対立的なポピュリズムや憎悪の扇動が見られるようになった。

90年代に成立したブレア政権（ニューレイバー）は、「多文化主義」を掲げて人種差別禁止や教育による異文化理解増進に熱心に取り組んだ。従来の社会主義路線やサッチャリズムとは異なる「第三の道」として、国家による福祉供給ではなくコミュニティの活力を利用した相互扶助の原則が示された。しかしながら、移民2世・3世の中にはうまく社会に適応できず、イラク戦争によって流入したイスラーム過激思想に共鳴してホームグロウン・テロリズム起こす者もいた。⁸

同時にEUも移民問題を扱ううえで欠かすことはできない。イギリスは1973年にECに加盟し、国内の熟練・非熟練労働力の不足を背景に特に90年代後半から移民受け入れに前向きな姿勢を示してきた。⁹2004年以降の東欧拡大によって、経済の低迷する旧共産圏

⁶ 『愛と戦いのイギリス文化史』第15章ブリジット・ジョーンズの「自由」272頁。

⁷ 同上 279頁。

⁸ 長谷川貴彦『イギリス現代史』（岩波新書、一2017年）165頁。

⁹ 労働政策研究・研修機構『欧州における外国人労働者受入れ制度と社会統合』（労働政策研究報告書no.59 2006年）230-231頁 2026年2月3日閲覧。

から大量に労働者が押し寄せることとなった。特に顕著なのはポーランド系で、EU 離脱によって減少傾向にあるものの 2026 年現在およそ 70 万人と、イギリス国内で最大の外国人コミュニティの 1 つとなっている。¹⁰

3. 論文の構成

本論文では、戦後イギリス映画において移民労働者がどのように描かれ社会の中で生きてきたのか、サッチャー時代（1980 年代）とブレア時代（1990～2000 年代）の 2 つの時代に対応する映画作品を検討する。また分析に際して、社会と経済の両面から移民労働者が置かれた状況の変化を確認する。これらの議論から、新自由主義や EU 加盟によって弱肉強食的な競争が顕著となる中、移民労働者が最も良くも悪くも影響を受けやすい存在であることを明らかにする。映画は実在する社会の状況や普通の人々の日常を扱い、より強く視覚に訴えかける。特に後半で扱うケン・ローチ監督などは労働者階級を前面に押し出して、不平等や社会の矛盾といった政治的メッセージを強調している。¹¹ 映画を分析することで、データや文言からは分かりづらい移民労働者の感情や実生活を読み解いていく。また同時に映画というフィクションの中で監督が伝えるメッセージを人物の言動・行動から読み取り、私たちが向き合う現実についても考察する。

サッチャー時代においては、『マイ・ビューティフル・ランドレット』（1985）を扱う。80 年代のロンドン南部に暮らす、パキスタン移民 2 世の青年オマールが主人公だ。彼は叔父からランドリーの経営を任せられ、白人の幼馴染ジョニーを雇って立て直していく。容姿や食生活など一部を除けば白人のイギリス人と変わらないが、偏見や親世代（移民 1 世代）との価値観の違いに悩みを抱える。「有色」とされた側（オマール）が白人（ジョニー）を雇う構図は当時としては珍しく、非常にユニークで面白いと感じたと監督のステイヴン・フリーアーズは語っている。¹² オマールがランドリーの事業を成功させていく様から、移民労働者であったとしても新自由主義という実力主義の競争社会を生き抜き、その恩恵を受けるパターンもあることを明らかにする。

ブレア時代では、『この自由な世界で』（2007）を扱う。職業紹介所で働くアンジーは、ある日会社から不当に解雇されてしまった。それを契機に移民に仕事を紹介するビジネス

<https://www.jil.go.jp/institute/reports/2006/documents/059.pdf>

¹⁰ Energy Radio, “Poland’s President Karol Nawrocki to Visit the UK on Key Two-Day Working Trip” 2026 年 1 月 20 日閲覧。 <https://energyradio.uk/polish-president-karol-nawrocki-uk-visit/>

¹¹ Özal Çiçek, “The Transformation of Ken Loach’s Cinema Through the Concept of Job Insecurity: An Evaluation of the Navigators, Bread and Roses and It’s a Free World”, *Essays on Economics & International Relations: Global Studies Vol. 11*, edited by Sophio Midelashvili, İsmail Şiriner, Şevket Alper Koç, IJOPEC publication, 2023, p.100.

¹² YouTube, “Stephen Frears in conversation with Producer Colin MacCabe on My Beautiful LAUNDRETTE (1985)”, Retrieved 2026.1.10.

<https://www.youtube.com/watch?v=DKufY84cioc>

を友人のローズと始めるが、次第に儲かるという理由で不法移民への紹介に手を染めてしまう。こちらは移民が抱える経済的格差や貧困が大きな課題である。アンジーと仲を深めるポーランド人青年や亡命を求めるイラン人家族の様子が描かれており、たとえ本国で質の高い教育や訓練を受けても他国では苦しい立場に置かれる場合も少なくない。突如解雇されるなど弱い立場にあったアンジーが、利益のために移民労働者を搾取する側になってしまう事実にも目を向ける。本作品を通じて、競争社会に置かれた移民労働者が言語・文化などの面で不利な状況にあり、劣悪な環境に置かれていることを明らかにしていく。

終章において、2つの映画に登場する移民労働者を比較し、新自由主義やEU東方拡大に起因する社会の変化によって彼らが最も影響を受けやすい存在であることを再確認する。またこれまでの議論を整理し、イギリス社会で移民として働く正の面および負の面双方を明らかにする。

II. 80年代の二世移民たち

1. 制作背景

『マイ・ビューティフル・ランドレット』は1980年代のロンドンを舞台とし、パキスタン移民2世のオマールが幼馴染のジョニーとぼろぼろのランドリーを立て直す物語である。アルコール依存症の父と暮らす日々だったが、ある日転機が訪れる。実業家である叔父のナセルのもとで働くことになり、労働によって賃金を得ることで喜びを感じる。やがてナセルやジョニーの力を借りながら、ランドリーを経営し社会での成功を夢見ていく。

脚本は後に長編小説『郊外のブッダ』(1990)で名を広めるハニフ・クレイシだ。移民2世の少年の苦しみや葛藤を描く『郊外のブッダ』とは対照的に、本作は事業を成功させて希望を見出す若者をコミカルに描く。監督のステイヴン・フリアーズはインタビュー¹³の中で、クレイシ自身が脚本を自宅の郵便受けに投函してきたことが始まりと述べている。当初人種がテーマということで、警察による抑圧や差別がテーマの映画になると懸念していたが、パキスタン人移民が白人を雇ってランドリーを営む構図が非常に面白いと感じたと語っている。チャンネル4(テレビ放送)用の映画として制作したが、反響を呼び最終的にアカデミー賞を受賞するに至った。

2. パキスタン・コミュニティ

どの時代も移民は都市部にコミュニティを形成し、集団で生活することで支えあいながら生活を送ってきた。コミュニティ(Community)は共同体と訳され、「①一定の地域に居住し、共属感情を持つ人々の集団。地域社会。共同体。②アメリカの社会学者マクヴェー(Robert M. MacIver 1882~1970)の設定した社会集団の類型。個人を全面的に吸収する社会集団。家族・村落など。③群集②に同じ。」¹⁴の3つの意味を持つ。植民地時代か

¹³ 12に同じ。

¹⁴ 『広辞苑』第7版(岩波書店、—2021年)。

ら戦後にかけてパキスタン人は①②の意味におけるコミュニティをイギリス都市部に形成し、50年代・60年代から規模を拡大する。高技能・特殊技能労働者は年収の高さや社会での成功から注目を集めやすい。しかし、安価な労働者として親族とともに集団でイギリスにやってきて、寄り合って暮らすパターンも多い。それは同時に、コミュニティ内部における同質性が高まることを意味する。かつて彼らがパキスタンにいた頃は、パンジャーブ人やバシュトゥーン人といった民族で認識や区別をされることが多かっただろう。だがイギリスに移住して以降、人種・宗教・肌の色・言語といった要素が、イギリスに多い白人と比較され、アイデンティティとして記号化されてしまう。その結果、移民第1世代は遠い異国の地でこれらを心の拠り所とし、周囲や第2世代に対しても時に文化や慣習を押し付けてしまう。インド系移民の話ではあるが、『恥と名誉』（原題 "*shame*") というインド系イギリス人2世の著者、ジャスビンダル・サンゲーラの自伝がある。15歳の少女が見ず知らずの男と強制結婚させられそうになり逃げだす物語だが、これを不道徳として私的な制裁を家族が加える「名誉犯罪（名誉殺人）」も描かれる。2008年には「強制結婚」を禁じる法律が成立したものの、同年に設立したヘルプラインに4000件の電話があるなど「名誉犯罪」の問題はなお深刻である。¹⁵

この話題は、オマールと父のフセイン、叔父のナセルにおいても無関係ではない。オマールは冒頭で父の世話や家事をこなすが、父に文句を（おそらく日常的に）言われるなど不満を抱えている。将来に関しても、もともとジャーナリストとして目覚ましい活躍をした経験から、息子には大学に行かせるつもりだと語っている。フセインがランドリーを訪れた際も、下着の洗濯屋だと貶める発言をしており、ジョニーにオマールを説得して進学させようと試みた。一方のオマール自身は退屈な生活から抜け出す方法として、また成功への近道として商売に魅力を感じている様子だ。社会主義者の父から離れ、サッチャリズムやその申し子であるナセルに傾倒していくことで、父フセインがイギリスに来てから決して得られなかった自分で道を切り開く力（agency）を手に入れた。¹⁶ ただナセルに対しても、価値観が100%一致するわけではない。ナセルから娘タニアと結婚するように言われ、タニアに言い寄られたこともあって当初は前向きな返事をするが、これはナセルに気に入られて資金を得るためについた嘘である。オマールは同性のジョニーと相思相愛で、ナセルのおぜん立て（押しつけ）には関心がないからだ。ランドリー開店日にナセルが愛人と踊る奥でオマールとジョニーがキスをするシーンがあり、ナセルとオマールの明確な対比となっている。

¹⁵ ヒューライツ大阪 国際人権ひろばNo.92 「自分を見つめ、他者とつながる--『恥と名誉--移民二世・ジェンダー・カーストの葛藤を生き延びて』 2026年2月1日閲覧。

<https://www.hurights.or.jp/archives/newsletter/section3/2010/07/----.html>

¹⁶ Alisha Mathers, "In this damn country, which we hate and love": The Pakistani-British Diaspora During the Thatcher Years in My Beautiful Laundrette, (1985)", University of Southampton, p.8, 26 July 2021.

https://eprints.soton.ac.uk/470454/1/Q6_01_AlishaMathers.pdf

このような世代間のギャップやそれに起因する圧力に、移民労働者は左右されやすい。労働者である前に、移民としてそれぞれ家族や地域のコミュニティに属するからだ。しかしこの映画において、サッチャリズムの進行によって個人主義的な生き方を追求する人が増えたことも示されている。オマールはまさにその代表例であり、ランドリーの経営を通じて自立していく様子が描かれる。また次章で扱う EU 加盟後に顕著になるが、一人単身で職を求めてイギリスにやってくる労働者が増加する。彼らはコミュニティに属さなければ世代間ギャップや他者の圧力に悩む必要はないが、孤立してしまうというジレンマを抱えている。

3. 実力社会で得たお金の自由

従来は〇〇人だから…といった差別や偏見が根強く、イギリス社会での成功は移民労働者にとって困難なものであった。ところがサッチャリズムの始まりと共に、弱肉強食の競争社会の傾向がより一層強まった。民営化に代表されるように、誰しものが市場の健全な競争にさらされるべきとの考えである。ナセルやサリームはこの変化をきちんと認識し、様々な事業の成功を通じて財を成してきた。冒頭ではサリームが（ジョニーが属する）極右団体のナショナル・フロントを、中盤ではナセルがジョニーと詩人の男をそれぞれ家賃未納で強制退去させる様子が描かれる。またオマールは従業員として幼馴染のジョニーを雇い入れるが、監督のステイーヴン・フリーアーズが語るように¹⁷非白人が白人を雇用するという構図は当時としてはまだ一般的ではなかった。オマールが後に、ナショナル・フロントのメンバーを店の改装に協力させていることも同様である。これらの事実が示すのは、サッチャリズムの競争社会の恩恵によって、移民であっても実力があれば社会で成功することができるようになったということだ。ナセルは「我らが愛し憎むこの英国では望めば何でも手に入れることができる」「金は泥の中にある」といった発言から、手段を選ばず（泥臭く）ビジネスを展開してきたことが窺える。サリームについても、薬物の取引という明らかに違法な手段で財を成し、成金のような派手な生活を送っている。オマールはこの2人に影響を受け、サリームに運ぶことを依頼された薬物を一部くすねてランドリー改装費に回すなど、手段を選ばない描写もある。

もう1つ大事な要素は、オマールの立場が被用者から経営者に変わっていることである。当初ナセルに雇われて洗車の仕事に励んでいたが、ある時叔父にランドリーの経営を任せてほしいと頼みオーナーとなっている。叔父としては、面倒を見ている甥に言われて断れないという側面も否めないが、自身の事業を拡大するチャンスと見て最終的には任せている。若くて経験の少ない移民労働者が「使われる側」から「使う側」になることは、運が良いという要素はあるものの、競争の激しい社会で今後立場の逆転が見られるようになることを暗示しているのかもしれない。

¹⁷ 12 に同じ。

III. EU 加盟でやってきた移民たち

1. 制作背景

本作は主人公アンジーが意図せず移民労働者を搾取してしまうことがテーマとなっている。「安定した雇用から流動的な雇用へ変わりつつあり、以前から関心があった移民労働者について映画を撮ることにした」¹⁸と監督のケン・ローチが語るように、移民労働者と流動的な雇用は無関係ではない。搾取される側でなく搾取する側の視点で撮りたかったとし、主人公のアンジーが移民労働者に仕事をあっせんする中で、利益のため不法移民を働かせてしまう設定にした。別の対談では、2007年の制作当時イギリス国内に東ヨーロッパ出身の人が300万人いるとし、彼らが低賃金・長時間の労働をしている実態を問題視している。専門職が（生まれた東ヨーロッパの）国を去ることは悪影響を及ぼす上、人々が国や家族のもとを離れて搾取される場所に行くシステムには絶対に反対とも語っている。¹⁹ ケン・ローチは社会主義者として、今の資本主義社会のシステムや労働者を搾取する者たちに対する怒りをもって映画を撮影しており²⁰、本作も雇用の不安定さに苦しめられてきた主人公が逆に苦しませる側に立ってしまう現実、移民労働者の苦しさを丁寧に描いている。

是枝裕和監督は、ケン・ローチの作品は政府と労働者の単純な二項対立とはせず、彼らの生活や幸せを脅かす敵は生活の内部にもいることを描いている、と述べている。また良かれと思ってした行動が、かえって裏目に出てしまうことも題材になっている。²¹ 本作の主人公アンジーには一人息子のジェイミーがいるが、仕事が忙しいために一緒に暮らすことができず、それが原因で学校でも悪さをしてしまう。息子のために安定してお金を稼ごうと、友人のローズと職業紹介の仕事始めるが、不法労働者への仕事のあっせんや明書の偽造など利益のために悪事に手を染めてしまった。息子や両親を想って懸命に働き、貧困にあえぐイラン人家族に救いの手を差し伸べる、優しい性格であるにもかかわらずだ。

2. コミュニティの欠如

アンジーが親しくなったポーランド人青年にカロールという人物がいる。彼女の英語の通訳などを通じ次第に親密になっていく。ところが賃金の不払いをきっかけに関係がこじれ、最終的には信頼されなくなってしまふ。彼らはポーランド人労働者で固まって、日常

¹⁸ Socialist Worker, “Ken Loach interviewed about his new film, It’s a Free World”, Retrieved 2026.2.1. <https://socialistworker.co.uk/in-depth/ken-loach-interviewed-about-his-new-film-it-s-a-free-world/>

¹⁹ The Guardian, “Ken Loach and Paul Laverty”, Retrieved 2026.2.1. <https://www.theguardian.com/film/2007/sep/17/1>

²⁰ 是枝裕和 ケン・ローチ 『家族と社会が壊れるとき』（NHK 出版 2020 年）23-25 頁。

²¹ 同上

生活を送っている。アンジーとのやり取りで、英語にはあまり堪能ではない者も中には見られた。2004年のEU東欧拡大以降、旧東側の国々の労働者が高い賃金に魅力を感じてイギリスに大挙して押し寄せるようになった。移民労働者がイギリスで働くにあたり、コミュニティの欠如または不十分さは大きな問題となり得る。人口が多い国や特定の国に多数の移住者を送り込んでいる国は特に大きな問題ではない。しかし小さな国の出身者や核家族、さらには単身で移住した場合は、孤立するリスクを抱えている。2019年にジャーナリストのジェームズ・ブラッドワースが、ギグ・ワーカーとしてアマゾンの倉庫などで働いた経験を基に『アマゾンの倉庫で絶望しウーバーの車で発狂した』を著した。²²このノンフィクションにおいて、ギグ・ワーカーが劣悪な労働環境と最低賃金で働かされることに加え、社会的に孤立してしまう危険性も同時に指摘している。週6日朝から晩まで働き詰めで、疲労や低賃金から休日も体力の回復に費やさざるを得ないことを理由に挙げている。イギリス人の筆者が感じたため、英語が十分ではない外国人労働者はなおさらだろう。

伝統的な血縁関係の繋がりが薄れつつあるものの、今尚それらの重要性は高い。移民労働者は遠い異国の地に引っ越すことで、家族および地域のコミュニティから疎遠になってしまうことがある。特に地域のコミュニティについては、言語が障壁となるケースが見られる。『この自由な世界で』においても、ポーランド人の集団は職を得る前は昼間から外で集まって談笑するなど、明らかに街の中で浮いた存在となっている。不法移民が居住するトレーラーについても、周囲の住人との関わりは見られない。アンジーが面倒を見るイラン人家族は亡命要求の通らない不法滞在者であり、ひっそりと暮らす中で誰かに助けを求めすることも難しく孤立している。『マイ・ビューティフル・ランドレット』の移民労働者と明確に異なる点は、この家族・地域のつながりの有無である。EU拡大による急速な移民の流入に対処できていないことを意味し、現在もこれが課題であることに変わりはない。

3. 不安定な労働環境

ゼロ時間契約とは、予め決まった労働時間がなく、仕事のあるときだけ使用者から呼び出しを受けて働く契約で、労働時間に応じて賃金が支払われる²³ものである。雇用の柔軟性がメリットとされ、学生や何かしらの事情で働く時間を調整したい労働者にとっては満足度が高い。しかし、雇用の安定や賃金の妥当性には疑問も多く、法整備が課題となっている。本作でアンジーがローズと営む派遣労働はこれに該当し、必要な税金も十分に納めていないことから違法である。父親に最低賃金を支払っているか尋ねられて言葉を濁したこと、労働者からパスポートを取り上げて逃走を防いでいることなどから、移民労働者の

²² ジェームズ・ブラッドワース著 濱野大道訳『アマゾンの倉庫で絶望しウーバーの車で発狂した』(光文社、— 2019年)。

²³ 労働政策研究・研修機構「ゼロ時間契約の現状に関する報告書」2026年2月1日閲覧。
https://www.jil.go.jp/foreign/jihou/2022/08/uk_03.html

立場の弱さを利用していることが示されている。英語が得意ではないことを利用し、移民労働者に不利な労働契約を結んでいる可能性も否めない。不安定な雇用はプレカリアートと呼ばれる新たな層を生み出し、移民や女性といった人々を労働者階級の間から（下に）切り離すことを助長している²⁴。

職の専門性についても確認する。冒頭と結末のシーンにて、それぞれ求職中の労働者が資格などをアピールしているが、残念なことに資格とは関係のない仕事ばかり提案される。ケン・ローチも指摘するように²⁵、専門職の人材がイギリスでその仕事にありつけず、安い給与で働かされることはその国に悪影響（損失）をもたらす。アンジーはカロールやローズとの会話から、専門性の重要性を認識しているように見える。にもかかわらず、一度味を占めてしまったために安い賃金で働かせて最大限利益を上げるビジネスモデルから抜け出すことができない。移民労働者と同じように、過去に自身も会社から不当に解雇されるなど苦しみをかかっているが、もはや止めることは難しい。まさにケン・ローチの描きたい複雑さだろう。

IV. 終章

これまでの議論から、『マイ・ビューティフル・ランドレット』を中心に、サッチャリズムによって個人主義や人種に拘泥しない競争がイギリス社会に浸透した結果、移民労働者の中でも大きな成功を収める者が現れたことを確認した。また『この自由な世界で』を中心に、EUの東欧拡大によってそれらの国からイギリスに安価な労働力として移民が招かれた結果、立場の弱さから劣悪な労働条件・環境に置かれることを確認した。これらの議論を踏まえ、新自由主義の進行やEUなどからの労働者の流入で弱肉強食の競争社会となる中、イギリスで移民として働く労働者が最も影響を受けやすいことが明らかになった。

本論文は、他国に移り住んでマイノリティとして生きることが多い「移民」と、建前上対等な立場にあるはずの使用者と比較して弱い「労働者」の2つの側面を持つ人々に着目し、映画の表象を基に検討した。移民労働者は、どの時代・場所においても他者との共生が課題となる。また移民労働者の受け入れで、労働力の確保や異文化理解につながる一方、差別・排外主義や搾取といった問題も起こる。移民労働者について考えることは、現代の日本に生きる私たちにとっても無関係ではなく、今後も注視していきたい。

²⁴ 前掲 11 99 頁。

²⁵ 19 に同じ。